「朝日」ともあろうものが。

鳥賀陽弘道
Ugaya Hiromichi

徳間書店

「朝日」もう一つのあるべきものが

鳥賀陽弘道
Ugaya Hiromichi

江苏工业学院图书馆
藏书章

烏賀陽弘道（うがや・ひろみち）
1963年、京都市に生まれる。
86年に京都大学経済学部を卒業し、朝日新聞社記者になる。
91年から2001年まで『アエラ』編集部記者。同誌では音楽・映画などポピュラー文化のほか医療、オウム真理教、アメリカ大統領選挙などを担当した。98年から99年までニューヨークに駐在。92年にコロンビア大学修士課程に自費留学し、国際安全保障論（核戦略）で修士課程を修了した。
03年、退社してフリーランスとなる。
個人ウエブサイトは　http://ugaya.com

【主な著書】
『Ｊポップとは何か　巨大化する音楽産業』（岩波新書、05年４月）
『Ｊポップの心象風景』（文春新書、05年３月）
『文筆生活の現場』（中央公論新書ラクレ、共著。04年８月）
『日本メディアの対クリントン政権観』（1993年８月、アメリカ連邦議会調査局）

「朝日」ともあろうものが。

第１刷　2005年10月31日

著　　者　烏賀陽弘道
発行者　松下武義
発行所　株式会社 徳間書店
〒105-8055 東京都港区芝大門2-2-1
電話　編集部 03-5403-4344　販売部03-5403-4324
振替00140-0-44392
（編集担当）力石幸一
印　　刷　(株)シナノ
カバー印刷　真生印刷(株)
製　　本　大口製本印刷(株)

©2005 UGAYA Hiromichi
Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえ致します。

ISBN4-19-861884-4

「朝日」ともあろうものが。

◇目次◇

まえがき……5
第1章 ぼくはなぜこの仕事を選んだのか……17
第2章 みじめでまぬけな新米記者……26
第3章 パワハラ支局長……64
第4章 高校野球報道って偏向じゃないの……77
第5章 記者クラブには不思議がいっぱい……94
第6章 夕刊は不要どころか有害……146

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第7章　朝日の人材開発は不毛の荒野だった……160
第8章　ぼくが初めてハイヤーに乗った日……179
第9章　捏造記事はこんな風につくられる……193
第10章　上祐へのインタビュー原稿がオウムに渡っていた……210
第11章　「前例がない」の一言でボツ……222
第12章　かつて愛した恋人、アエラ……241
第13章　さようなら。お世話になりました。……261

装幀・装画……久保和正

まえがき

朝日新聞社に辞表を出したのは二〇〇三年五月末のことだ。

上司や同僚には一切相談しなかった。相談したところで止められるだけだ。別に慰留してほしくて辞表を書くわけじゃないし、状況に改善の可能性が残っていると思っているなら退社までしようなんて思わない。それに、いちど本気で決心してしまうと、誰かに後押ししてほしいとも、止めてほしいとも思わなくなるものだ。

というわけで、決行日を五月最後の月曜の午前中と決め、決心が鈍らないようカレンダーに大きな赤いマルをつけて部長に奇襲攻撃をかけることにした。午前十時、席に行くと、会議中とかでいない。戻ってきたところを見計らって「ちょっとお話ししたいのですが」と会議室に連れ込んだ。有無を言わせず「会社を辞めることにしました」と辞表の入った封筒を渡したら、「えっ」と言ったきり絶句してしまった。

「なんでだっ。理由がわからないっ」

腕組みした彼はこちらをにらんだまま沈黙している。ぼくがそこまで決心しているとは思いもよらなかったらしい。それを見て、こちらも言葉が出なくなった。そういう相手に、ゼロから説明して納得してもらおうと思っても、十七年間に積もりに積もったものはあまりに莫大で、とてもその場では説明しきれないことに気づいたのだ。

「会社がぼくにやらせたいことと、ぼくがやりたいことが食い違ってしまいました」

そう言うのがやっとだった。しばらく沈黙が続いた。偶然だが、この時の上司は、以前「前例

がない」と言ってぼくの原稿をボツにした元アエラ編集長だった。ぼくを見送る朝日最後の上司がこの人とは、不思議な縁だなあと思った。

「実はね」

ようやく彼は口を開いた。ようやく、最後になってこの人も何か本音を言ってくれるのか。ことここに至って、腹を割って話ができるのか。ぼくは身を乗り出した。

「ボクもこのようなものを受け取るのは管理職として初めてなんだ」

「はァ」

「ちょっと上と相談して、どうするか決めるから。それまでこれは預かっておくから」

やれやれ。最後の最後まで、この人らしいなあ、と思った。辞表に受理するもしないもないんだがなあ。などと思っていると、辞表の文面をにらんでいた彼の顔がはっと曇った。真剣そのものの表情でこちらに顔を上げた。

「ウガヤ君っ」

一体、何があったのか。ぼくは息をのんだ。

「『六月三十日付けで退社します』の『付け』に送りがなの『け』はいらんのじゃないか」

彼の指さす文面を見た。確かに、送りがなはいらない。ぼくの表記ミスだ。だが、自分の部下が辞表を出しているという重大事に、そんなことどうでもいいんじゃないのか。記事の原稿じゃないんだから。ぼくは力なく笑った。

そう。そんなこと、もう、どうでもよかった。

◇

辞表を出したあと、お世話になった先輩や同僚に挨拶をして回ったら、夕方になった。出社し

たときは晴れた青空がきれいだったのに、窓の外ではもう太陽がビルの谷間で陰っていた。
受付の前にぼんやり座って、しびれた頭を冷やしていると、スーツ姿の若い男女が十数人、会社を出ていくのが目に入った。入社一ヵ月目の研修を終えた新入社員たちだった。大きな出張鞄を下げて、胸に「××支局　○○」と書いた名札を付けているので、すぐわかった。名札を付けたまま会社を出ていく姿がおかしい。十七年前のぼくも、そういう要領の悪い若者だった。
会社を辞める日に新入社員の姿を見るというのは、まるで安っぽいドラマのラストシーンのようにできすぎだ。「かなわんなあ」と思った。でも、感傷的にならなかったといえば、うそになる。目がキラキラしていて、声が明るくて、背筋がまっすぐで、疲れた色などどこにもない若者。いいなあと思った。ぼくも十七年前は向こう側にいたのだ。
まわりの風景は、一九八六年にぼくが新入社員だったときのまま、何も変わらない。が、何かが変わってしまった。何かが失われてしまったのだ。ぼくの方か、朝日新聞社の方か、あるいはその両方から。

◇

なぜこんな本を書いているのか、ぼくは今も自問自答を繰り返している。こんな本を書く必要が、本当にあるのだろうか。その思いは今も消えない。何も言わず、ただ「お世話になりました。ありがとうございました」とだけ告げ、静かに去ることだって、ぼくには選択できる。その方が朝日の人たちには喜ばれることも間違いがない。この本を出すことで、何人か友を失うことにもなるだろう。ぼくをののしり、憎む人も増えるだろう。
実際、静かにひそやかに、ぼくは退社するつもりだった。会社勤めの末期、ぼくは心身ともに疲弊しきっていた。とにかく、静かに暮らしたかった。幸い、長く取材していた日本のポピュラ

ー音楽について本にまとめるという話を頂戴したので、しばらくはそれに専念するつもりだった。自宅にこもって、机に向かい、思う存分書く毎日。なんて素晴らしい生活だと思った。

静かに暮らしたいのだから、騒ぎを起こすなんて、もってのほかだった。ましてや朝日新聞社とことを構えようなどとは、これっぽっちも思っていなかったし、今もそんなつもりはない。

ところが、話は思いどおりにはいかなかった。

「一体どうしてまた、辞めたの?」。朝日新聞社を退社したとなると、行く先々で好奇の目にさらされるのは分かっていた。が、なぜそこまでこの会社に卷んでしまったのか、とても口頭では説明しきれない。それは、ガダルカナル島やノルマンディー海岸を生き残った兵士に「戦場とは一体どんな場所だったのですか」と答えさせるのに等しい。

そこで、頭の中を整理するつもりで、「なぜ朝日新聞社を辞めたのか」を書いてみた。口頭で説明するよりは、文章に書いた方が、ずっと能率よく自分の考えを伝えることができる。ぼくは元々そういう人間だし、そういう職業的訓練を受けてきた。

書き進めるうちに、やはりというか、十七年間に経験したことをざっと述べるだけで原稿用紙百枚にも膨らんでしまった。それを自分のウエブサイトに載せておいた。まあ、ぼくのようなしがないヒラ社員が退社したって、どうせ誰も関心を持たないだろう。くどくど口で説明するよりはずっと効率がいいだろうから、知り合いが読んでくれればそれでいいと思っていた。

ところが、これが大変な騒ぎを呼んでしまった。公開した最初の一ヵ月だけで七万のアクセスが殺到、あちこちのウエブやブログにリンクが張られ、毎日約五十通のメールが押し寄せた。ついに取材を申し込んでくる週刊誌まで現れるありさま。それから約四ヵ月、この騒ぎへの対応だけで日夜パソコンにへばりつかざるをえず、へとへとになった。静かな生活がぶち壊しである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところが、毎日押し寄せるメールを読み進むうちに、あることに気がついた。みんな判で押したように同じことを書いてくるのである。

「朝日ともあろうものが、こんなにひどいとは思いませんでした」

「朝日ともあろうものが、もう少しましだと思っていたのですが」

朝日ともあろうものが。朝日新聞社に勤務した十七年の間に、何度この言葉を読者の口から聞いたことだろう。

例えば、新聞記者時代、週一度の泊まり勤務の日。午前四時、宿直室で熟睡していると枕元で電話が鳴る。すわ大事件かと受話器を取ると、怒気を含んだオバサンの声がするのだ。

「朝日ともあろうものが、なんですか」

朝刊を読んだ早起きの読者が、記事への文句（苦情というほどではない。意見が言いたいだけ）を言いに電話してくるのである。が、こちらは寝ぼけていることもあって、何のことかわからない。

「朝日ともあろうものがなんですかって、何ですか」

そういうボケた返答をすると、オバチャンはなおいっそうエキサイトして怒鳴りちらすのだ。

新聞からアエラ編集部に移ったあとも、編集部で仕事をしていると、読者から「一言モノ申す」電話がかかってくる。会ったこともない社内の記者がやらかした誤報や訂正への苦情がかかってくる。論調への批判を言ってくる（朝日新聞への苦情なのに、なぜかアエラにかかってくる）。「おたくの編集委員は、テレビで戦争を解説しているときにニヤニヤして不謹慎だ」というのもあった。

で、その第一声が決まって「朝日ともあろうものが」なのである。

もちろんこのクリシェ（決まり文句）、ワタクシは朝日新聞のことを高く評価している、それなのにこんなことをするとは何だ、という意味だ。社交辞令か勘違いにしても、期待は高いのだろう。が、これほどぼくを当惑させるせりふもなかった。というのは、電話を切ったぼくが次に目にするのは、経費やタクシー券をチョロまかす同僚であり、記事の捏造を部下に強要するデスクであり、「前例がない」と言って原稿をボツにする上司であり、社用ハイヤーで奥様とフランス料理を食べに出かける幹部なのだ。一体この人たちのどこが「朝日ともあろうものが」なんだ。

とはいえ読者の気持ちも、ぼくはわかる。ぼくもかつては一読者として、朝日新聞社を外から眺めることしかできなかったからだ。ところが、入社してみると、期待は無惨にうち砕かれる。それも、仕事が意外に泥臭いとか、頭脳より体力だとか、そういう無邪気な話ではない（そんなことは本を読んでおけばわかるし、当然覚悟のうえでこの仕事を選んでいる）。ぼくを愕然とさせたのは、もっと醜悪で、もっと矮小な、腐敗と不正なのだ。社外から見る朝日新聞社と、社内で見る朝日新聞社は、壮絶に食い違っている。聖書に感動し修道僧として生きる決心をして、修道の甲斐あってローマ教皇庁に招かれたので、胸躍らせつつ登庁してみると、中では泥酔した高僧たちがオンナを片手にドンチャン騒ぎ。そんな感じかもしれない。

ぼくは確信した。朝日に限らず、報道機関の内部について、読者は知らないのだ。知らされていないのだ。

考えてみてほしい。新聞社は、憲法で保障された「知る権利」を国民（イコール有権者・納税者・消費者）になり代わって代行する代理人、エージェントなのだ。そんな、民主主義社会にとって死活的に重要な公的責任を負っている組織の内部が、これほどまでに誰の目も届かないまま

で、いいのか。

誰かがやらなければならないのに、誰もやらない。ならば、仕方がない。ぼくがやればいいのだ。退社した今でも、ぼくは一義的にはジャーナリストなのだ。ぼくは原義でのJournalistという職業に誇りを持っている。自分が目撃した不正や腐敗は、読者への報告の義務を負っているのだ。だから、十七年の間、朝日新聞社でぼくが見聞したことについても、この職責を忠実に実行しようと思う。

ぼくには様々なレッテルが貼られることだろう。「内部告発者」「裏切り者」「後足で砂をかけて辞めた」等々。どれも笑止千万である。もう一度言うが、ぼくはジャーナリストなのだ。ジャーナリストとして朝日新聞社という現場にいたのだ。自分の勤務先だったからといって、例外とすることはできない。読者に報告し、職責を全うしなくてはならない。感情的には葛藤があっても。

これまでに朝日を退社した人は何千人といる中に、こうした内部の不正や腐敗を語る人はほとんどいない。彼らの「記者魂」には例外があり「沈黙の領域」がある。ぼくは、そんな得体の知れない「沈黙の掟（おきて）」よりは、記者・ジャーナリストとしての職責に忠実でいようと思う。

ぼくの十七年間の経験は、個人的には思い出深いものだが、派手さは何もない。小泉政権の外交政策に反対して職を辞した外交官や、乳製品会社の不正を告発した業者のように、人々の記憶に残る大事件で彩られているわけでもない。もとより、ぼくは朝日の論調に反発して退社したわけでもない。このまま朝日新聞社にいては、自分が職業人として成長できない。ダメになってしまう。そういう個人的な絶望感が主な動機だった。

だから、これから語る内容は「朝日新聞社に就職し、記者として働くと、どういう世界、どう

いう日常生活が待っているのか」という、ぼくの個人的な体験の報告である。ぼくのようなヒラ記者が体験した世界だから「些細だが、日常的な不正」の話が多い。「取締役会議で何が話し合われているのか」とか「朝日の社説はいかにして論調を決めるのか」といった「雲の上の話」は知らないし、書けない。ぼくは最下層の下っぱだったので、彼らと接点はなかった。そのへんの話がお知りになりたい方は、どうぞ今すぐ本を閉じてください。

心情的には、深刻な葛藤が今も続いている。自分の人生の半分近く、十七年間を過ごした組織である。ただの世間知らずな大学生だったぼくを職業人として育てたのは、間違いなく朝日新聞社だ。それには一生感謝し続けることだろう。美化されがちな、青春の甘美な思い出も多々ある。友だちも、まだたくさん残っている。まるで「故郷」あるいは「親」のようだ、と思う。故郷も親も、完全に愛することも、また完全に憎むこともできない。それは、切り捨てることのできない「自分の一部」になってしまうのだ。

報道の現場が抱える問題点をほとんど何も解決できないまま去ってしまったことも、ぼくの心を苦しめる。そしてまた、友人の多くをそこに残したまま去ったことも、胸が痛い。明日は決死の突撃という日に兵役が終わり、戦友を残したまま帰還した兵士のような気持ちなのだ。

そういった意味で、自分が当事者としてそこにいた体験を書きつづるのは、本当に難しい。まるで昔の自分に会いに行くような、そんな感覚なのだ。ぼくの仕事は「冷静な観察者」でいることなのだが、完全に冷静でいることなど、不可能だ。これも、あらかじめお詫びしておく。

ぼくが見た朝日新聞社は、手足が壊死し、失明するまで放置した、瀕死の糖尿病患者に似ていた。そうまでなっても、十年単位でゆっくりと病気が進行したため、本人は病気であるという自覚に乏しい。そして医者にも行かないまま、相変わらず浴びるように酒を飲んでいる。病気が進

めば進むほど、その苦痛を紛らわせるためにまた酒を飲み、病状を悪化させるという悪循環である。

ぼくがこの本で書くことは、確かに朝日新聞社についてのネガティブな事象が多い。だが、目の前にいるのは瀕死の重病人なのである。その病状を正確に報告しようとすれば、ネガティブな話が増えるのは仕方がない。だから、何度でも強調するが「どうです。ひどい会社でしょう。だからボクは退社したんですよ」などと、自分を正当化するためにこの本を書いているのではない。それはこの場ではっきり否定しておく。

瀕死の重病人が倒れているのを見つけたとき、すべきことは病人を罵(ののし)ることではない。「この人は重病です！　誰か助けてください！」と大声で叫ぶことだ。救急車を呼んで、病院に運び込むことだ。そして壊死している部分を切除するなり、注射を打つなり、救命治療を受けさせることだ。そうしないと、その人は本当に死んでしまう。

もちろん、彼は抵抗するだろう。「オレは病気なんかじゃない！　健康そのものだ！」「自分で治せる！　ほっといてくれ！」と。そう叫んで暴れるだろう。

だからといって、この瀕死の病人を放っておいていいのか。このまま死なせてしまっていいのか。朝日新聞社が潰(つぶ)れてしまえば、それでいいのか。ぼくはそうは思わない。それほど事態は甘くない。

朝日に限らず、どこかの言論機関が力を失うことは、言論の多様性がひとつ損われることを意味する。権力者に楯突くことができる組織がひとつ減ることを意味する。ぼくたちの民主主義社会にとって、それは間違いなくダメージである。喜ぶのは権力者であって、有権者にも納税者にも、害しか与えない。まるでゆっくりと空気中の酸素が抜けていくように、じりじりとぼくたち

を追いつめるだろう。最後に窒息するのは、ぼくたち自身なのだ。

ぼくは自分の見たこと、考えたことを書いて公にする職業に就いている以上、考えたこと、感じたことは書く。だが、ジャッジするつもりはない。それは記者の仕事ではない。読者の皆さんが考えてくれればそれでいい。ここに書くことはすべて、これまでぼくの仕事がそうであったように「ぼくはこんな事実を見聞きしてきました。読者のみなさんはどう思いますか」という「読者への問いかけ」にすぎない。そして、それに賛同しようがしまいが、読んだ人の自由だ。

しかし、もし「経費をチョロまかす上司や、腐敗した社員なんて、どの会社にもいるさ」と強弁する人がいるなら、思い出してほしい。新聞社はなぜ、記者クラブという権力情報へのアクセスを特権的に独占しているのか。彼らは国民の「知る権利」の代理人、エージェントだからこそ、その特権が許されているのではなかったのか。だからこそ、彼らの仕事は私企業でありながら公的な責任を負っているのではなかったのか。

そうした特権だけを享受しながら、義務は履行しないなどというムシのいい話を通用させてはならない。エージェントがどんな仕事をしているのか、クライアントは知る権利があるし、エージェントは報告する義務がある。委託された職務を誠実に実行しているのか、まして不正や腐敗がないのか、チェックを受けるべきなのだ。もしあなたが「知る権利代行委任料」＝新聞購読料を支払っているなら、その使われ方を知っているか、それに納得がいくかどうか、一度でいいから考えてみてほしい。新聞社の中がどうなっているのか、もっと関心が高まっていいとぼくは思う。

ここに書いた内容の多くは、朝日新聞社だけでなく、他の新聞社やテレビ局など、オールド・メジャーマスメディアなら、どこも似たような問題を抱えているはずだ。特に、記者クラブに連

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com